

## 文学教材の研究―『小倉百人一首』の言語表現―

荻原 桂子

九州女子大学人間科学部人間発達学科人間基礎学専攻  
北九州市八幡西区自由ヶ丘一・二（〒八〇七―八五八六）

（二〇一九年五月二十八日受付、二〇一九年五月二十八日受理）

### はじめに

新学習指導要領の高等学校国語科の目標は「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語での確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを旨す」として以下のように提示している。

- (1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができる。
- (2) 生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を伸ばす。
- (3) 言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、言語感覚を磨き、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

新学習指導要領の全教科・科目で育成を目指す三つ柱である「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力」とは、国語科の場合には国語の特質を理解し適切に使う知識・技能を身につけ、他者との関わりの中で伝え合うための思考力・判断力・表現力等を養成し、国語を尊重してその能力の向上を図ろうとする態度であると説いている。

なかでも、選択科目「古典探求」では「古典を主体的に読み深めることを通して、自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探求する科目として、主に古文・漢文を教材に、『伝統的な言語文化に関する理解』を深めることを重視するとともに、『思考力・判断力・表現力等』を育成する。」（「中教審答申」平成二八年一二月）ことが重要視されている。古典を主体的に読み深めることが、共通必修科目「言語文化」の内容の発展

と位置づけされている。

### 一、『小倉百人一首』について

『小倉百人一首』とは、百人の作者の歌を各一首ずつ撰んで百首で構成する秀歌集である。選者とされる藤原定家の日記『明月記』文暦二年（一二三五）五月二七日のくだりに、息子為家の岳父宇都宮頼綱の依頼により、頼綱の山荘（京都市右京区嵯峨）の障子に貼る色紙に和歌を書いて届けたとある。同じく、天智天皇から家隆・雅経に及ぶとある。昭和二六年発見された、定家の『百人秀歌』には、『小倉百人一首』にない三人（藤原定子・源国信・藤原長方）の歌が入って、後鳥羽院と順徳院の歌がない。順番も異なり、源俊頼の歌が異なる。『小倉百人一首』の九八首は文暦二年までにできた九つの勅撰集から取られている。直近の定家撰『新勅撰集』は文暦二年三月一二日に完成させたが、これには後鳥羽院と順徳院の歌は入っていない。鎌倉幕府と戦った承久の乱に敗れ、隠岐と佐渡に流された二人が勅撰集に入ったのは為家が編んだ『続後撰集』であった。「後鳥羽院」「順徳院」というおくり名は定家の死後に定められたことから後人による撰という説もある。部立から見ると恋が半数近くを占め、四季の中では秋が最も多い。これは、定家が余情・妖霊を重んじたことの反映とも考えられ、掛詞・縁語などの修辞を用いた知的で優麗な歌が多い。

撰者であるとされる藤原定家（一一六二―一二四一）は、歌人・古典学者で、『御子左家』と称される和歌の名門の家柄に生まれる。父は、藤原俊成である。定家の子孫は「二条・京極・冷泉」の三家に分裂し、冷泉家は現在まで続き、

計	続後撰和歌集	新勅撰和歌集	新古今和歌集	千載和歌集	詞花和歌集	金葉和歌集	後拾遺和歌集	拾遺和歌集	後撰和歌集	古今和歌集	歌集名
6					1		1			4	春
4		1	1	1						1	夏
16			4			1	2	1	2	6	秋
6			2	1		1				2	冬
1										1	離別
4		1								3	羈旅
43		1	5	8	3	1	9	8	4	4	恋
20	2	1	2	4	1	2	2	2	1	3	雑
100	2	4	14	14	5	5	14	11	7	24	計

「時雨亭文庫」を管理している。定家は後鳥羽院に命じられ『新古今集』の撰者の一人となったが、後鳥羽院と折り合いが悪く、次第に鎌倉幕府寄りになる。家集『拾遺愚草』など膨大な和歌を残し、晩年は平明な歌風に転じた。評論に『八代集秀逸』『近代秀歌』があり、克明な漢文日記『明月記』がある。また、『源氏物語』の本文校訂を行い、『奥入』などの注釈書を残したことも知られている。天智天皇（大和）から順徳院（鎌倉）まで百人の歌人の歌を唱えることで、児童・生徒が「意識して目をこらすと、いつしか耳を澄ませるような態度で和歌に対している」という古典学習の環境を創り出すことができる。

『小倉百人一首』の和歌は、すべて勅撰集から選ばれている。八代集歌集別では、『古今和歌集』24首、『後撰和歌集』6首、『拾遺和歌集』11首、『後拾遺和歌集』14首、『金葉和歌集』5首、『詞花和歌集』5首、『千載和歌集』14首、『新古今和歌集』14首であり、その他6首である。部立は、春6首、夏4首、秋16首、冬6首、雑19首、離別1首、羈旅4首、恋43首である（上の表参照）。歌はほぼ時代順の並びで、約六〇〇年弱にわたる歌人で、うち僧13人、女性21人である。性別・身分は、男性天皇7首、女性天皇1首、親王1首、内親王1首、官人58首、女房17首、母2首である。親子関係も多く天智天皇と持統天皇、平兼盛と赤染衛門、清原元輔と清少納言、和泉式部と小式部内侍、紫式部と大式三位、藤原俊成と藤原定家、後鳥羽院と順徳院など19組で、祖父母孫関係は7組である。歌人相互の関係を重視した撰歌となっている。

## 二、女性歌人21人の和歌について

『小倉百人一首』に関して高階陸郎氏は、藤原定家が「王朝全体を概に入れて、蓋をした」<sup>2</sup>と述べているが、勅撰和歌集の八代集（『古今和歌集』、『後撰和歌集』、『拾遺和歌集』、『後拾遺和歌集』、『金葉和歌集』、『詞花和歌集』、『千載和歌集』、『新古今和歌集』）には藤原氏全盛時代の宮廷を舞台に詠まれた和歌が多い。なかでも目を引くのが女性歌人の活躍である。男性歌人79人に対して、女性歌人は21人にもつぼる。日本文学史上、画期的な出来事であるといえる女性歌人21人の和歌について考察する。歌に付した数字は百人一首の配列番号を示す。

### 2 春すぎて 夏来にけらし／白妙の

衣ほすてふ 天の香具山 【持統天皇『新古今和歌集』夏（一七五）】

春が過ぎて夏が来てしまっているらしい。夏になると真っ白な衣を干すという天の香具山なのだからという歌意である。作者の持統天皇は天智天皇の皇女、第四一代天皇である。十三歳の時に叔父の大海人皇子（のちの文武天皇）の皇后となる。皇太子だった実子草壁皇子が亡くなったため自ら即位し、藤原京に遷都する。孫の文武天皇に譲位し史上初の太上天皇となり、文武天

皇と並座して政務を執つた。『万葉集』には「春過ぎて 夏来るらし 白妙の衣ほしたり 天の香具山」とある。『万葉集』のほうは二句切れ、四句切れで直接的に見たままを詠んだ力強い表現であるのに対して、『小倉百人一首』のほうは伝聞表現に変化して柔らかく、余情が感じられる表現になっている。「白妙の」は「衣」の枕詞で、「けらし」「てふ」が余情を奏する要因になっている。

### 9 花の色は うつりにけりな／いたづらに

わが身世にふる ながめせしまに【小野小町】古今和歌集』巻下(一一三)】  
春の長雨が降っている間に桜の花はむなく色あせてしまった。私の容貌も、物思いにふけりながら世を過ごしている間に、すっかり衰えてしまったという歌意である。作者である小野小町は、六歌仙(僧正遍照・在原業平・文屋康秀・喜撰法師・小野小町・大友黒主)、三十六歌仙にも選ばれている数少ない歌人である(他に在原業平、僧正遍照がいる)。絶世の美人、世界三大美人の一人とも言われ、各地に小町伝説を残しており、謡曲『卒塔婆小町』の題材にもなった。『古今和歌集』には「いにしへの衣通姫(そとほりひめ)の流なり」と記され、在原業平とも関係があったと言われている。「百夜通」とは、深草少将が小町のもとを九十九夜もかけて通つたのに受け入れなかつたというエピソードである。「ふる」は「(時が)経る」と「(雨が)降る」、「ながめ」は「長雨」と「眺め(物思いにふける)」が掛詞になっている。世間には「色見えて うつろうものは 世の中の 人の心の 花ぞありける」が有名であったが、『小倉百人一首』以後、この歌が有名になった。

### 19 難波潟 みじかき芦の ふしの間も

逢はでこの世を 過ぎてよとや【伊勢】新古今和歌集』恋二(一〇四九)】  
難波潟の芦の、その短い節と節の間のような、ほんのわずかな間も逢わなのまま私にこの世を終えてしまえとあなたは言うのでしょうかという歌意である。作者の伊勢は、伊勢守藤原継蔭の娘で、三十六歌仙の一人である。宇多天皇の中宮温子に仕え、温子の兄藤原仲平(藤原基経の息子)や宇多天皇に愛された、古今集時代の代表的歌人である。家集に『伊勢集』がある。宇

多天皇第四皇子敦慶親王との間に生まれた娘である中務は優秀な歌人となる。

### 38 忘らるる 身をば思はず／誓ひてし

人の命の 惜しくもあるかな

【右近】拾遺和歌集』恋四(八七〇)】

忘れ去られる私自身のこととは何とも思われない。ただ、いつまでも愛すると、かつて神に誓ったあの人、命をおとすことになるのが惜しまれてならないという歌意である。作者の右近は、右近少将藤原季繩の娘で、醍醐天皇の皇后隠子に仕えた恋多き女性とされ、藤原敦忠や元良親王、藤原朝忠などと恋をした。「身をば思はず」とは、あなたから忘れられる自身の身で、自分の身のことは思はないといい、あなたが自ら誓ったことを破った結果として、命が縮まるような神罰がくだることを惜しく思いますという、相手のことを心配した歌である。『源氏物語』で光源氏が須磨明石から退去後、紫の上に明石の君の話をしたとき、紫の上はこの右近の「身をば思はず」の歌を口ずさむ。平安王朝時代の仮名文学は、和歌の世界が貴族社会の生活の一部であったことを語っている。

### 53 嘆きつつ ひとり寝る夜の 明くる間は いかにも久しき

ものとかは知る

【右大将道綱母】拾遺和歌集』恋四(九一二)】

嘆き嘆きして、ひとりで寝る夜の明けるまでの時間がどんなに長いものであるか、ご存じでしょうか。ご存じないでしょうかという歌意である。『拾遺和歌集』に「入道摂政まかりたりけるに、門を遅く開けければ、立ちわづらひと言ひ入れて侍りければ」という詞書きがある。夫藤原兼家が訪ねて来た夜、戸を開けるのが遅く、兼家が怒った時の歌である。作者の右大将道綱母は、藤原倫寧の娘で、美貌でかつ和歌の才にも恵まれ、兼家の第二夫人となり道綱をもうけた。本歌の初出である兼家との結婚生活を綴った『蜻蛉日記』(九五五年)がある。

### 54 忘れじの 行く末までは かたければ

今日を限りの 命ともがな【儀同三司母】新古今和歌集』恋三(一一四九)】

いつまでも忘れまい、とおつしやるそのお言葉が、遠い将来までは頼みにし難いので、そのお言葉のあつた今日という日を最後とする私の命であつてほしいものであるという歌意である。作者の儀同三司母は、高階成忠の娘で名は貴子、藤原兼家の長男、中関白藤原道隆の妻である。儀同三司伊周、権中納言隆家、一条天皇中宮定子の母である。『新古今和歌集』に「中関白かよひそめ侍りけるころ」とあり、世間的には夫子どもに恵まれて幸せな女性として過ごしたが、夫道隆の死後、伊周と隆家が道長との政争に敗れたため、晩年は不遇であつた。

#### 56 あらざらむ この世のほかの 思ひ出に

今ひとたびの 逢ふこともがな【和泉式部】後拾遺和歌集『恋三(七六三)』  
まもなく私は死んでしまうでしょうから、あの世への思い出として死ぬ前にもう一度あなたにお会いしたいものですという歌意である。作者の和泉式部は、生年は未詳だが貞元年間(九七六〇七七)に出生したらしく、父は越前守大江雅致で受領階級の女である。母は冷泉帝皇后昌子内親王家の女房であり、式部は母に従つて内親王家で生育した。生まれ持った文学的才能が、高い文化的水準のなかで洗練され、早くから歌人としての名声が高かつた。夫和泉守橘道貞との間に娘(小式部内侍)が生まれるが、冷泉帝第三皇子である年下の為尊親王と関係したことから離婚、父から勘当される。為尊親王が亡くなった約一年後には、実弟敦道親王と恋愛関係となる。敦道親王の死後、その恋愛を綴つたのが『和泉式部日記』である。その後、一条天皇中宮彰子の女房として後宮に出仕、藤原道長の信望が厚かつた家来藤原保昌と結婚する。娘にも先立たれ、晩年は恵まれず、『和泉式部集』の和歌には「生の不安と恋の間に揺れ動いた式部の心の軌跡を物語っている」<sup>3</sup>というところ、奔放な恋に生きた女性歌人の魂が宿る。

#### 57 めぐりあひて 見しやそれとも わかぬ間に

雲がくれにし 夜半の月かな【紫式部】新古今和歌集『雑上(一四九七)』  
久しぶりにめぐりあつて、その人かどうか見分けがつかないうちに、雲間に隠れてしまった夜中の月のように、あの人にはあわただしく姿を消してしま

つたという歌意である。作者の紫式部は、歌人藤原兼輔を曾祖父に持ち、父は漢学者でもあつた越前守藤原為時である。幼い頃から聡明で、男兄弟よりも漢文を読みこなした。その後、父親ほど年の離れた藤原宣孝と結婚し、娘の大式三位が生まれるが、宣孝は早々亡くなり、未亡人となつた式部は一条天皇中宮彰子に仕える。『源氏物語』や『紫式部日記』、『紫式部集』がある。初句の字余りで、瞬く間に帰つてしまった幼友だちを惜しむ孤独感を色濃く表現している。

#### 58 有馬山 猪名の笹原 風吹けば

いでそよ人を 忘れやはする【大式三位】後拾遺和歌集『恋二(七〇九)』  
有馬山に近い猪名の笹原に風が吹くと、笹の葉がそよそよと音をたてる。さあそのことですよ、お忘れになつたのはあなたのほう、私はどうしてあなたのことを忘れるでしょうかという歌意である。作者の大式三位とは、紫式部の娘賢子で、母と同じく一条天皇の中宮彰子に仕えた。後に後冷泉天皇の乳母となり、後冷泉天皇の即位に伴い従三位に叙せられた。

#### 59 やすらはで 寝なましものを さ夜更けて

かたぶくまでの 月を見しかな【赤染衛門】後拾遺和歌集『恋二(六八〇)』  
あなたがおいでにならないことをはじめから知っていたら、ためらわずに寝てしまいましたでしょうに。今か今かとお待ちするうちに夜がふけて、西に傾くまで月を見たことですという歌意である。作者の赤染衛門は、赤染時用の娘、文章博士大江匡衡の妻である。夫婦仲はむつまじく、「匡衡衛門」と呼ばれた。藤原道長正妻倫子とその娘である一条天皇中宮彰子に仕えた。『栄花物語』正編の作者ともいわれている。当時は和歌の上手な人が代作することもあり、本歌は、赤染衛門が妹の恋の相手である藤原道隆に詠んだものである。「やすらはで 寝なましものを」は反実仮想で「あなたが来ないと知っていたら」を想像させることになる。

#### 60 大江山 いく野の道の 遠ければ

まだふみもみず／ 天の橋立【小式部内侍】金葉和歌集『雑上(五八六)』

大江山を越え、生野を通って行く丹後への道のりは遠いので、まだ天橋立の地を踏んだこともなく、また、母からの手紙も見えていませんという歌意である。作者の小式部内侍は、父は橘道貞、母は和泉式部である。母とともに一条天皇の中宮彰子に仕えた。関白藤原教通など多くの公卿たちに愛されたが、若くして死去した。『金葉和歌集』に「和泉式部、保昌に具して丹後に侍りける頃、都に歌合ありけるを、小式部内侍、歌よみにとられて侍りけるを、中納言定頼、局のかたにまうできて、歌はいかがせさせ給ふ、丹後へ人はつかはしてけむや、使まうでこづや、いかに心もとおほすらむなど、たはぶれて立ちけるをひきとどめてよめる」とある。「小式部十四、五歳か」<sup>4</sup>とあるように、幼少から母である和泉式部とともに後宮で過ごしたことが小式部の和歌技術をきたえた。

### 61 いにしへの 奈良の都の 八重桜

けふ九重に にほひぬるかな

【伊勢大輔『詞花和歌集』春(二七)】

昔の奈良の都の八重桜が、今日は九重の宮中で、ひととき美しく咲き誇っていることですよという歌意である。作者の伊勢大輔は、伊勢の祭主大中臣輔親の娘で、能宣の孫である。一条天皇の中宮彰子に仕え、和泉式部・紫式部などと交流があった。『詞花和歌集』に「一条院御前ならのやへぐくらを人のたてまつり侍りけるを、そのをり御前に侍りければ、そのはなをたまひて歌よめとおほせられければ、よめる」とある。さらに『伊勢大輔集』には「女院の中宮と申しける時、内にあはしまししに、奈良から僧都の八重桜を参らせたるに、今年のとりに入れは今参りぞとて紫式部のゆづりしに、入道殿きかせ給ひて、ただにはとりいれぬ物とおほせられしかば」とあり、八重桜の受け取りを紫式部が新参の伊勢大輔に譲り、藤原道長に歌を詠めといわれ詠んだという歌である。

### 62 夜をこめて 鳥のそらねは はかるとも

よに逢坂の 関はゆるさじ

【清少納言『後拾遺和歌集』雑二(九四〇)】

夜の明けないうちに、鶏の鳴き真似で人をだまそうとしても、あの函谷関ならともかく、この逢坂の関は決して許さないでしょう。だまそうとしても、

私は決して逢うことをゆるさないといい歌意である。作者の清少納言は、歌人清原元輔の娘で、深養父の曾孫である。一条天皇の中宮定子に仕え、三蹟の一人藤原行成とのやりとりを詠んだ歌である。宮中での随想『枕草子』がある。

### 65 恨みわび ほさぬ袖だに あるものを

恋に朽ちなむ 名こそ惜しけれ

【相模『後拾遺和歌集』恋四(八一五)】

恨んだ末に、もう恨む気力も失って、涙を乾かす間もない袖さえ惜しいのに、まして、この恋ゆえに世間に浮名を流して朽ちてしまふであろう我が名が、いかにも惜しいことですよという歌意である。作者の相模は相模守大江公資の妻で、脩子内親王家に出仕し、宮廷歌人として活躍した。この時代の女性歌人として、赤染衛門・紫式部・和泉式部と並び称されている。

### 67 春の夜の 夢ばかりなる 手枕に

かひなく立たむ 名こそ惜しけれ

【周防内侍『千載和歌集』雑上(九六一)】

春の夜の夢ほどの、はかないたわむれの手枕のために、何のこいもない浮名が立ったとしたらなんとも口惜しいことですよという歌意である。内侍の枕が欲しいという呟きに御簾の下から男の腕が現れた。作者の周防内侍は、周防守平棟仲むねなかの娘で後冷泉天皇以下四代の宮廷に仕え、当時の多数の歌合に参加した。

### 72 音に聞く 高師の浜の あだ波は かけじや

袖の ぬれもこそすれ

【祐子内親王家紀伊『金葉和歌集』恋下(五〇一)】

噂に名高い高師の浜のいたずらに立つ波はかけますまい。袖が濡れると大変ですから。噂に高い浮気なあなたの言葉は心にかけますまい。あとで袖が涙でぬれるといけませんからという歌意である。作者の祐子内親王家紀伊は母とともに後朱雀天皇の第一皇女祐子内親王に仕えた。言い寄る藤原俊忠に返歌した。

## 80 長からむ 心も知らず 黒髪の

乱れて今朝は 物をこそ思へ〔待賢門院堀河〕『千載和歌集』恋三(八〇二)  
 末永く変わらないという、あなたのお心もはかりがたく、お逢いして別れた今朝は黒髪が乱れるように心が乱れて、あれこれと物思いをすることですという歌意である。作者の待賢門院堀河は、院政期歌壇の代表的な女性歌人で、崇徳天皇・後白河天皇の母待賢門院に仕え、待賢門院が出家した際には、自らも出家した。西行の『山家集』に登場、『今鏡』にも不出世の女性歌人とある。

## 88 難波江の 芦のかりねの ひとよゆゑ みをつくしてや

恋ひわたるべき 〔皇嘉門院別当〕『千載和歌集』恋三(八〇六)  
 難波の入り江の芦の刈りねの一節ではないが、ただ一夜の仮寝のためにあの濡標のように身を尽くして恋い続けなければならぬのでしょうかという歌意である。作者の皇嘉門院別当は、太皇太后宮亮源俊隆の娘である。崇徳天皇の皇后である皇嘉門院聖子に仕えた。大阪湾では濡標が知られており旅情がある。

## 89 玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば 忍ぶることの

よわりもぞする 〔式子内親王〕『新古今和集』恋一(一〇三四)  
 わが命よ、絶えてしまうなら絶えてしまえ。このまま生きながらえているならば、堪えしのぶ心が弱まると困るからという歌意である。詞書きに「百首歌の中に忍恋を」とある。作者の式子内親王は、後白河天皇皇女で、賀茂神社の斎院を勤めた。新古今和歌集時代の代表的な女性歌人である。藤原俊成に和歌を教わる。藤原定家の日記『明月記』の記事などから、定家と恋仲にあつたとされ、謡曲「定家」の題材にもなっている。

## 90 見せばやな 雄鳥のあまの 袖だにも ぬれにぞぬれし

色はかはらず 〔殷富門院大輔〕『千載和歌集』恋四(八八四)  
 血の涙で変わってしまった私の袖をお見せしたいものです。松島の雄鳥の漁師の袖でさえ、波に洗われて濡れに濡れに濡れてしまいました。色は変わりませ

んのにとり歌意である。作者の殷富門院大輔は、藤原信成の娘で、後白河天皇の皇女亮子内親王(殷富門院)に仕えた。院政期の有数の女性歌人で、俊恵の催した歌林苑で活躍した。多作家として知られ、「千首大輔」の異名があつた。

## 92 わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の

人こそ知らね かわく間もなし〔二条院讃岐〕『千載和歌集』恋二(七五九)  
 私の袖は、引き潮の時にも海中に隠れて見えない沖の石のように、人は知らないだろうが、涙に濡れて乾く間もないという歌意である。詞書きに「石に寄する恋といへる心」とあり、片思いを詠んだ優れた歌である。作者の二条院讃岐は源頼政の娘で、二条天皇に、後に後鳥羽天皇の中宮宜秋門院任子に仕える。平安末期から鎌倉初期にかけての女性歌人で俊恵の催した歌林苑にも参加した。

53番54番の二人の母に続いて、56番から62番までの和歌は、一条天皇後宮に女房として出仕した七人の才媛が絢爛豪華な和歌の競演を繰り広げたもので、障子に貼る色紙としても見事だったに違いない。晩年の歌人藤原定家による美意識が張り巡らされていて、後世に伝えられた多彩な和歌の世界であり、圧巻である。

## 三、王朝女性文学としての和歌

メールや電話のない時代に、人はどのように自分の想いを相手に伝えていたのだろうか。日常生活の効率化を重視し、古典が疎遠なものになっていく現代、学校教育における古典学習は重要な意味をもつ。歴史的仮名遣いであっても日本語であるかぎり、行間に滲み出た歌人の感性は、日本人という感覚を呼び覚ますに違いない。歌人の尾崎左永子氏は古典には「文章全体に一つのリズムがあつたことも、楽に読めた原因」<sup>5)</sup>だと述べている。日本文学史に名をのこす女性作家は、男性作家に比べ数少ない。

王朝時代に女性が活躍できた最大の原因は、仮名文字の発見普及にあり、和歌が貴族社会における重要なコミュニケーションの手段になったことであ

る。受領階級という貴族社会においてはさほど身分の高くない女性たちが、和歌の才能で上流階級の男性たちと互角に交流できたのである。『小倉百人一首』の五分の一を占める女性歌人のうち、56番から62番（和泉式部・紫式部・大式三位・赤染衛門・小式部内侍・伊勢大輔・清少納言）に登場するのは、一条天皇と藤原道長を取り巻く王朝文学の最盛期の女性歌人たちである。尾崎左永子氏は、「一見奔放に見える和泉式部は、昔からまるで男性遍歴自由な女のようにいわれているのだが、その歌は、王朝時代の誰よりも魅力的である。」<sup>6</sup>と述べている。平安時代に活躍した女性歌人のなかでも、「その身体表現、官能性、豊かな表現力において、他の歌人とは一線を画する」<sup>7</sup>和泉式の和歌について考察する。まずは、『和泉式部日記』<sup>8</sup>の冒頭から、王朝女性文学の特質について考察する。

夢よりもはかなき世の中を嘆きわびつゝ、明かし暮らすほどに、四月十日にもなりぬれば、木の下くらがりもてゆく。築土の上の草青やかなるも、人はことに目もとぐめぬを、あはれとながむるほどに、近き透垣のもとに人のかはひすれば、誰ならんと思ふほどに、故宮に候ひし小舎人童なりけり。

『和泉式部日記』は、長保四年（一〇〇二）六月一三日、二十六歳で薨じた為尊親王の喪に服した一〇ヶ月後から始まる。夢よりも儂い現実の生とはいかなるものか。和泉式部の生の原点には不安があった。

### 冥きより冥き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月

『拾遺和歌集』に収録された和泉式部の初出歌であるが、目を閉じて静かにある物事を考え、現前の境界を離れて想像をめぐらすという世界観が読み込まれている。詞書きに「播磨の聖の御許に、結縁のために聞こえし」とあることから、馬場あき子氏は寛弘四年（一〇〇七）式部二九〇三〇歳位の作と推定され、「上人に結縁を求め、救済を願った一首をもつて、歌人和泉式部の作品世界が開幕することも、その後の式部の命運と考え合わせると感慨

深い」<sup>9</sup>と述べている。さらに、馬場あき子氏は「この初夏の木々の暗い繁茂と、みどりの草のなまなましい生命感とは、よく式部の重たい情念のかなしみを物語っていると想われる」<sup>10</sup>と述べている。日記の冒頭と合わせて考えるに和泉式部の生に対する根源的な不安は文学者としての資質であり、「刹那を永遠と見なした顔」<sup>11</sup>は、その生の不安から逃れるための恋に全生涯を捧げる和泉式部の和歌の本質である。尾崎左永子氏は「小式部との母子の関わり、その死後の、彰子中宮との心のこもった歌のやりとりなど、和泉式部についての話題はまだまだ尽きないが、和泉式部の魅力を知るには、やはり『和泉式部日記』と『和泉式部集』の両方を「直か読み」するのが一番である」<sup>12</sup>と述べている。同時代の和泉式部評が、紫式部の『紫式部日記』にある。

和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ。うちとけて文はしり書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉の、にほひも見え侍るめり。歌は、いとをかしきこと、ものおぼえ、うたのことわり、まことの歌よみぎまにこそ侍らざめれ、口にまかせたることどもに、かならずをかきし一ふしの、目にとまるよみそへはべり。それだに、人の詠みたらん歌、難じことわりあるたらんは、いでやきまで心は得じ、口にいと歌の詠まるるなめりとぞ、見えたらずに侍るか。はづかしげの歌よみとはおぼえ侍らず。

紫式部が中宮彰子のもとに出仕したのは寛弘三年一二月二九日、後宮女房としては、和泉式部の二年ほど先輩にあたる。紫式部が「より告白的・内面的に詠嘆に賭けて奔放をおそれなかつた和泉式部の歌の生命力に、歌人としては数歩をゆずらなければならぬ」<sup>13</sup>ことを認め、和泉式部に一目置いていることがわかる。

### おわりに

アクティブ・ラーニングを活用した古典学習にカルタあそびがある。百枚の札を円形無差別にまき散らし、その中心に読み札を重ねておき、札の周囲に円座する。読み手は全員で順次札を一枚手に取り、一首ずつおもむるに上

の句だけを読み上げるといった「ちらし取り」の他に、「坊主めくり」「源平合戦」「リレー合戦」「サシ取り」がある。競技カルタのルールは「サシ取り」と同じで、次のような方法がある<sup>14</sup>。

- 一、百枚の札を裏向けにしてよくかき混ぜ、そこから二五枚ずつを取る。
- 二、一対一の勝負で、持ち札二五枚を膝の前、自分の方に向けて並べる。
- 三、並べ終わったら一五分の暗記時間がある。
- 四、読まれた札に先に触れるか、競技線から出した方の取りになる。
- 五、敵陣の札を取った時、またはお手つきをした時は、自陣の札から任意に一枚を相手に送る。

六、先に自陣の札がなくなった方が勝ちになる。

近年では小学校で『五色百人一首』に取り組ませていることから、『小倉百人一首』に出会った経験をもつ若者が多い。しかし、その経験の多くは、和歌を暗唱することであり、『古今和歌集』や『新古今和歌集』から選ばれた歌のうち数首を除けば、和歌の内容そのものに目を向ける者は少なかつた。美しい四季の自然や風景や植物、人を恋する気持ちなど、三十一文字に込めた作者の心情に寄り添いながら鑑賞することは、文学教材としての『小倉百人一首』の重要な点である。古典の指導は、「読むこと」の領域の指導事項として扱われることが多かったが、今回の学習指導要領の改訂にともない、古典学習にも「思考力・判断力・表現力等」の言語活動が十分行われるような教材が求められている。『小倉百人一首』はカルタ遊びを出発点にして、言語表現やICT活用<sup>15</sup>によるビジュアル化といった、さまざまなアプローチが考えやすい教材と言える。

新学習指導要領の「古典探求」は、「言語文化」で育成された資質・能力のうち「伝統的な言語文化に対する理解」をより深めるため、古典を学習教材とする選択科目として設定された<sup>16</sup>。「古典探求」で、『百人一首』の和歌を鑑賞することに取り組ませることは有効である。和歌は、俳句と同様、限られた言葉の中にさまざまな技法を用いて、広く深い世界を表現する定型詩であることから、豊かな表現力の養成にも大きな効力を発揮すると考える。

#### 参考文献

- 池田亀鑑・秋山虔校注『紫式部日記』岩波文庫一九六四年  
尾崎雅嘉『百人一首一夕話』上・下岩波文庫一九七二年・一九七三年  
清水文雄校注『和泉式部日記』岩波文庫一九八一年  
清水文雄校注『和泉式部集』和泉式部続集『岩波文庫一九八三年  
有吉保『百人一首 全訳注』講談社学芸文庫一九八三年  
鈴木日出男『百人一首』ちくま文庫一九九〇年  
田辺聖子『田辺聖子の百人一首』角川文庫一九九一年  
白州正子『私の百人一首』新潮文庫二〇〇五年

#### 註

- 1 小池昌代「訳者あとがき」池澤夏樹個人編集『日本文学全集02』河出書房新社二〇一五年、四〇七頁。
- 2 高橋睦郎『百人一首 恋する宮廷』中公新書二〇〇三年、二二四頁。
- 3 守屋省吾「和泉式部」『別冊歴史読本 百人一首一〇〇人の生涯』新人物往来社一九八〇年、一五九頁。
- 4 高橋睦郎 前掲書 一二二頁。
- 5 尾崎左永子「王朝文学の世界へ」『王朝文学の楽しみ』岩波新書二〇一一年、三頁。
- 6 尾崎左永子「日記文学の面白さ」前掲書 七七頁。
- 7 谷知子『カラー版 百人一首』角川ソフィア文庫二〇一三年、六一頁。
- 8 川瀬一馬氏は「和泉式部日記は藤原俊成の作」という立場をとっている。川瀬一馬校注・現代語訳『和泉式部日記』講談社文庫一九七七年、一六七頁。
- 9 馬場あき子「和泉式部の恋の原点に」『和泉式部』美術公論社一九八二年、一〇頁。
- 10 馬場あき子「為尊・敦道両親王との恋」前掲書 五八頁。
- 11 清水文雄「解説」『和泉式部日記』岩波文庫一九八一年、一三〇頁。
- 12 尾崎左永子 前掲書 八二頁。
- 13 馬場あき子「上東門院の和泉式部」前掲書 一六五頁。



14 伊藤秀文「かるた競技の歴史と他のあそび方」『別冊歴史読本 百人一首  
一〇〇人の生涯』新人物往来社一九八〇年、二七四頁を参照した。

15 加藤直樹氏は「国語教育と情報通信技術の活用」において「短歌や俳句  
の学びでのICT活用では、他者の短歌・俳句を読んで、その情景に合う  
写真を探すという実践」について示唆している。河添房江編『アクティブ・

16 ラーニング時代の古典教育』東京学芸大学出版会二〇一八年、四一頁。  
さらに「生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させることをねらいと  
している」と指摘している。大滝一登・高木展郎『新学習指導要領対応  
高校の国語授業はこう変わる』三省堂二〇一八年、一二七頁。

**Study of literary teaching materials  
—Linguistic expression of *Hyakuninisshu*—**

Keiko OGIHARA

Course of Principal Human Sciences, Department of Human

Development, Faculty of Humanities,

Kyushu Women's University

1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyusyu-shi

807-8586, Japan

No English abstract